日本で唯一のフランス音楽のピアノコンクール。第6回はレベルの高い実力伯仲の戦いとなる。

ドイツ系音楽が盛んな日本ではややなじみの薄いフランス音楽。その普及のためにあえて、フランス音楽をテーマにして開催されているのが、「安川加壽子記念コンクール」である。過去５回開催され、新進ピアニストの登竜門としても定着してきた。６回目となる今回はさらに応募者のレベルがあがり、優秀な人材がこぞって目指すコンクールとなった。

フランス音楽の普及も兼ねたユニークなコンクール。

料理の世界ではフランス料理は有名だが、実は音楽の世界にもフランス系音楽が存在する。バッハやベートーヴェンなどのドイツ系の音楽が構造的で重厚なイメージなのに対して、フランス系の音楽は開放的で色彩感の強い音楽だ。作曲家で言えば、ドビュッシーやラヴェル、フォーレなどである。

こうしたフランス系の音楽を日本に広めたのがピアニストであり、日本ピアノ教育連盟の初代会長を務めた安川加壽子さんである。残念ながら1996年に亡くなられたが、その功績を讃え、その意志を継ぐために始まったのが「安川加壽子記念コンクール」である。

公益財団法人 日本ピアノ教育連盟の副理事長赤澤立三（日本大学 芸術学部教授）さんは

「フランス音楽をテーマとしたピアノコンクールとしては日本で唯一のものです。演奏テクニックもドイツ系とは異なる部分があるので、演奏者にとってはたいへん難しく、挑戦しがいのあるコンクールだと思います」と解説する。

つまり、このコンクールを目指すことは音楽家としての幅を広げ、技量の上達を促すことにつながるのだ。しかし、その壁は決して易しくはない。日本のトップレベルの技術がなければ本選はおろか、予選にも出場できないそうだ。

6回目となる今回は総勢66名が応募した。1次予選が7月19日に大阪音楽大学ミレニアムホールで、同21、22日に東京の保谷こもれびホールで行われ、この時点で21名に絞られた。さらに7月29、30日の両日に2次予選があり、7名が翌日の本選に進んだ。わずか10日間で1次予選から本選まで3回の演奏を行うという、かなりハードなスケジュールである。

優秀な人材が目標とし、競い合うコンクールへと進化した。

7月31日。本選の舞台にヤマハ、カワイ、スタインウェイという3社のピアノが用意された。出場者は、まずどのピアノで演奏するかを選ぶのである。自分で楽器を選ぶということは、演奏の狙いやそのために必要な音を明確に把握していなければできない。音楽や演奏への理解を主張する意味でも重要なのだ。

「日本のトップのコンクールでは当たり前のことですが、ピアノメーカー各社さんともたいへん協力的で、このコンクールのために優秀な調律師を派遣してくださいました。たいへん素晴らしい環境だと思います」と赤澤さんは語る。

さらに審査員も審査委員長の多美智子氏のほか超一流の先生方を揃えた。

「審査員のレベルがコンクールのレベルを決めると言ってもいいでしょう。ですから、ここはどうしてもキープしなくてはなりません」

舞台は整った。コンクール本選の課題曲は別表の通り、もちろんフランスの作曲家が並ぶ。30分～40分の演奏時間で出場者たちは精一杯の演奏を披露した。優勝したのは、東京藝術大学1年の仁田原祐さん。「安川加壽子音楽賞」と特別賞の「全日本社会貢献団体機構賞」を合わせて受賞した。また2位となった桐朋学園大学3年の見崎清水さんにも特別賞の「全日本社会貢献団体機構賞」が贈られた。

優勝した仁田原さんは受賞に驚きながら「2次予選と本選が連日という初めての経験で勉強になった。体力的にも、もっと力をつけたい」と今後の研鑽を誓った。今回は前回と参加人数は変わらなかったものの、レベルは非常に高く実力伯仲の戦いになったそうだ。彼らが今後、日本の音楽界の牽引力になることは想像に難くない。

すでにこのコンクールからは多くの演奏家たちが巣立っている。前回優勝の川﨑翔子さんは国内外でソロリサイタルを行うなど精力的な活動を行っている。その川﨑さんは高校1年生の時、1回目のコンクールを会場で聴いて出場者の演奏に圧倒されたそうだ。しかし、その体験が「いつかは私も…」という意欲に結びついたという。

フランス音楽の普及と新進ピアニストの育成というユニークなコンセプトを保ちながら、このコンクールは今後ますます重要なイベントになっていくに違いない。

コンクールは回を重ねるごとに参加者のレベルがあがり、これからも発展が期待される

担当者より

コンクールの質的レベルを支えていただき感謝しております。

公益財団法人 日本ピアノ教育連盟
副理事長
赤澤立三さん

第5回に続き、AJOSCにはご支援賜り、心より御礼申し上げます。コンクールにとって審査員や会場、施設などの質を保つことは大変重要なことですが、コスト的には大きな負担となります。しかし優秀な人材の発掘を目標とし、研鑽を積むコンクールでなければ存在意義はありません。当コンクールが日本のトップレベルに育ったのも皆様のご理解の賜と感謝しております。

優勝した東京藝術大学１年の仁田原祐さん

受賞した３人（左から）見崎清水さん、仁田原祐さん、大伏啓太さん

本選の課題曲

次のAとBをそれぞれ演奏してください。
ただし、A、Bの演奏時間の合計は30分以上40分以内としてください。
A．ドビュッシー：前奏曲集 第1集、第2集より任意の2曲
B．次の作曲家のピアノ曲から1曲または2曲以上。
（2曲以上の場合は同一の作曲家でなくてもかまいません）
ショパン、フランク、フォーレ、ドビュッシー、ラヴェル、プーランク、メシアン、デュティーユ